2024年5月発行
茨木御堂
第295号

茨木御堂

真宗大谷派
茨木別院
（輪番　河原　恵）
〒567-0817　茨木市別院町3-31
TEL（072）622-2903
FAX（072）625-9445

南無阿弥陀仏　人と生まれたことの意味をたずねていこう　みんなに願いがかけられている

花まつり

雑行を棄てて本願に帰す

（『真宗聖典』三三九頁）

「雑行を棄てて本願に帰す」というお言葉は、『教行信証』の方便化身土巻の後序に出てきます。宗祖親鸞聖人が法然上人に出遇われ、自力の雑行を修める心を棄て、他力の本願に帰して生きることを表白された言葉です。ここには、「愚禿釋の鸞、建仁辛の酉の暦」と、宗祖の名と回心の時が示されています。つまり、愚かなものであるこの親鸞は、二十九歳の時に法然上人の教えを聞き、自力を棄てて本願力回向の信心に生きる者になったと言われるのです。

「回心」については、『歎異抄』の第十六章に次のように表されています。「その回心は、日ごろ本願他力真宗をしらざるひと、弥陀の智慧をたまわりて、日ごろのこころにては、往生かなうべからずとおもいて、もとのこころをひきかえて、本願をたのみまいらするをこそ、回心とはもうしそうらえ。」（『真宗聖典』　六三七頁）と言うのです。

私たちは、自分の思いどおりになると「たすかった」と言います。逆に、思いどおりにならないと、「何故こんな目に遭わなければならないのか」と愚痴の言葉が出てきます。自分の思いどおりになることが幸せだといいますが、実際には、思いどおりにしたいという心が「苦しみ」を生むのではないでしょうか。

かなり前のことですが、ご門徒の方が次のように言われました。「ご縁さん、真宗のお救いというのは、おかげさまと言うことですね」と。それから、何年か経ったとき、同じご門徒の方が「ご縁さん、真宗のお救いというのはおまかせと言うことですね。」と言われました。

「おかげさま」は、自分の思いがかなったときに出る言葉です。まわりの方に感謝するという意味では、大切な心だと思います。一方、「おまかせ」は、良いも悪いもなく、すべてを、自分を超えた如来のはたらきに任せると言うことです。宗祖の「雑行を棄てて本願に帰す」という言葉は、このような生き方を言うのではないでしょうか。

南無阿弥陀仏　輪番　河原 恵

茨木別院関連ホームページ
茨　木　別　院 ➡ ibarakibetsuin.or.jp
いばらき大谷学園 ➡ ibarakibetsuin.or.jp/kids/

真宗教団連合ホームページ
http://www.shin.gr.jp/
真宗教団連合　検索

園の子どもたちへ　いばらき大谷学園

出会い・ご縁を大切に

副園長　久保 幸子

私は、保育士という仕事を続けてきた中で、今までたくさんの子ども達、保護者の方々と出会ってきました。そして、月日が経ち、その園児として出会った子ども達と、今度は保護者という立場で再び出会えることがあります。小さかった子ども達が立派になった姿を見ることができる、そして、当時は保護者として関わっていた、祖父母となられた方々と、懐かしいお話しができる、これは、保育士をしている中でも、大きな喜びの一つだと思っています。

当時のお話をしていると、「先生、よく覚えていますね」と言われることがありますが、名前を聞いただけでも、当時かぶっていた帽子の色を思い出し、○○組だったな、など不思議なもので、こんなことがあった、あんなこともあったと、どんどん記憶がよみがえってきます。保育者にとっては、出会った子どもたちのことは、例え何年経っても、記憶の中にあり、決して忘れていくものではないのです。

今年度もたくさんの園児さんが、いばらき大谷学園に入園されました。このいただいたご縁、そして、子どもたちや保護者の皆様との出会いを大切に、これからも日々保育に向き合っていきたいと思います。

また、コロナ禍を経験した今、こうして普通に過ごせていることを、あたり前と思わず感謝をしながら、子ども達と共に色々な経験を楽しみながら過ごしていきたいです。

好奇心を大切に！

保育教諭　藤原　歩

私が保育をしていく中で大切にしている事は、楽しそう、やってみたい、と思えるような言葉掛けです。なにをするにも最初のインパクトによって印象が変わってしまい、意欲を持つ、持たないで取り組むときの身に付き方が大きく変わってしまうからです。だからこそ、より意欲を持てるような言葉を選ぶようにしています。

すると、自然に子どもたちから「こんなことしてみたい。」と、発言が増えるようになりました。子どもたちは、好奇心の塊です。「どんなことをしてみたい？」と子どもたちに問うとたくさんの意見が飛びかいます。すべてが行動に移せるわけではありませんが、できることは保育の中に取り入れています。行動に移せたときには、嬉しい気持ちから笑顔が溢れる姿が見られました。

また、子どもたちが答えられるようにすることで、みんなが考えることができ、いろんな意見があることを知ることができます。発した意見を認められると個人の自信にもつながるので、全員に耳を傾けるよう意識しています。そしていろんなことに興味を持てるように、季節や行事にまつわる話をしたり、絵本や図鑑で子どもたちに伝えられるようにしています。

子どもたちの意見に耳を傾け、どんなことに興味を持って、どんなことをしてみたいと思っているのかを感じ取りながら、これからも過ごしていきたいと思います。そしてなにより子どもたちが楽しいと思えるような保育をしていきたいです。

茨木別院　月行事ご案内

●教如上人ご命日・同朋会（どうぼうかい）
・日時　五日（日）午後一時半より
・講師　加藤 恵 師　・会場　別院会館

●本山九日講
・日時　九日（木）午後二時より
・講師　茨木別院輪番　・会場　是三寺

●おみがき
・日時　十四日（火）午前十時より
・会場　別院本堂

五月

●永代経法要　ーお勤めと法話ー
・日時　十六日（木）／　十七日（金）
午後一時半より午後三時頃まで
・講師　川那邉 章 師　・会場　別院本堂
＊十六日（木）の永代経法要前より
茨木別院門徒会総会を開催します

●親鸞聖人ご命日・婦人会例会
・日時　二十八日（火）午後一時半より
・講師　茨木別院輪番　・会場　別院会館

六月

●教如上人ご命日・同朋会（どうぼうかい）
・日時　五日（水）午後一時半より
・講師　加藤 恵 師　・会場　別院会館

●親鸞聖人ご命日・婦人会例会
・日時　二十八日（金）午後一時半より
・講師　茨木別院輪番　・会場　別院会館

令和五年十一月十五日　結願逮夜法話

「無量寿に生きよう」③

講師：延塚 知道 師（大谷大学名誉教授）

昨日から続けてお話しさせてもらいます。私が子供の頃、私の寺に集まっていたおばあちゃんたちは、苦労した人ばっかりでした。大きな爆発事故で、ほとんどの方が旦那さんやおじいちゃんといった男手をなくしてしまった。みんな消防ポンプに来て、「なんでこんな目に合わないかんのか。」と、毎日のように畳を叩いて泣いていました。しかし、そういう苦労を通してみんなすばらしい念仏者に育てられたのです。みなさんの話をする時間が無いので去年一〇七歳で亡くなったおばあちゃんの話をしましょう。

毎年欠かさず聞法に来ていた方でしたが、一〇〇歳の時の報恩講で、これが最後と思ったのか、一番後ろの柱に寄りかかっていました。私が「お互いにいつも自分たちの都合ばかりで生きていますが、仏さまのいのちをいただいて、仏さまの世界に生かされて、仏さまの世界に帰っていく。だから私たちの思いの通らない仏さまの世界でいろんなことが起こってくる。」と言うと、「そうそうボンちゃんの言う通り。」と、おばあちゃんが言ってくれました。「爆発事故が起こった時にせっかく戦地から帰ってきた父ちゃんが死んだのよ。じいちゃんもみんな男手は死んだ。嫁に来た私だけが残り、子供三人の手を引いていた。田んぼも畑も砂漠みたいになっていて、一人で泥を除いてこれか

ら食べさせていこうと思ったら、どうしたらいいかわからずに、何遍も首つろうと思った。けど、後ろで子どもが泣くし、死ぬに死ねなかった。けど、どれだけ泣いても元には戻らん。結局それを引き受けないと仕方が無かった。」と言って泣いていました。

それに続けて、「ボンちゃん悪いことだけではなくて、いいことも思い通りにならないのよ。」と言われました。「どういうこと。」と聞くと「その時に気が付かなかったけど、お腹に赤ちゃんがいたのよ。嬉しい気持ちはあったけど、この子が産まれたらどうやって生きるのかと思ったし、私が寝付いたら来年の春に仕事が終わらない。だからどうしようかと思って私は泣いたのよ。ところが子供が産まれる時に、周りの人がみんな自分のところの仕事が終わってから夜九時ごろ、カンテラを持って集まってくれて、みんなで畑を直してくれたのよ。その時どれほど嬉しかったか。いい所も悪い所も、人間の届かないところで起こっている。その全部を引き受けていく、それが南無阿弥陀仏の教えだ。」とおばあちゃんが言うのです。おばあちゃんすごいでしょ。「その通りや。こっち来て私と話し代わってくれ。」と冗談が出たほどでした。

そんなおばあちゃんが昨年、一〇七歳で亡くなりました。お孫さんに「おばあちゃん偉かったか。」と聞くと、「ものすごく優しかった」と答えました。「おばあちゃんは偉かった、私は七〇年以上おばあちゃんと付き合ってきたけど、おばあちゃんは人の悪口を一回も言ったことがなかった。」先日も盆にお参りしたら、私の手を握って、「寝たきりで私は何もできんのに嫁がようしてくれる。」と、涙流しながら言うのよ。私の周りには、そんなおばあちゃんたちばっかりだった。報恩講などは、いつも泥だらけのモンペを履いていたおばあちゃんが、その日だけはちょっと光った着物を着ていました。そのうえしなくてもいい化粧までして、嬉しそうな顔をして「ナンマンダブ、ナンマンダブ」と言っていた顔が忘れられないのよ。親鸞聖人の教えはわからなかったけれども、私が大好きなおばあちゃんたちがみんな念仏を称えて、生活は苦しいのに嬉しそうに「ありがたい」と言って生きていた。それが私を仏教に向かわせたのだと思います。

私は僧侶になったら生活できないから、なったらアカンのは坊さんやと思っていました。絶対に父親のような僧侶になりたくない、そのためには大谷大学にだけは行かないことです。だから私は理科系志望でした。友だちも理科系でみんな立派になっています。私の親友は七〇歳になるまで大成建設の顧問をやっていました。私は貧乏でしたから、そんな風になりたかった。けれど大学に落ちたのです。すると大嫌いだった父親が涙を流しながら両手と頭を畳に着けて「これからお前はどういう生き方をするか分からん。好きなように生きたらいい。けど、どんなに人から褒められるような生き方をしても、仏教が分からなかったら自分自身にならないのだ。仏教さえ分かったら、良いことも悪いこともまるごとお前の人生になる。貧しかったら貧しいことに耐えられる。豊かなら豊かになったことを喜べる。どちらでも自分の人生になる。だから他のことは勉強せんでもい

い。頼むから大谷大学に行って仏教を勉強してくれ。」と頼まれました。父親の涙を初めて見ましたから、私はそれに騙されて大谷大学へ行きました。

仏教を勉強してもよく分かりませんでした。それは、仏さまの悟りが人間の分別を超えているからです。お釈迦様や親鸞聖人のことばは、みなさんの頭に語り掛けているのではありません。身に語り掛けているのです。だから身が分かるまで聞く。それが大学の勉強をしている時には、分かりませんでした。だから苦しかったです。真面目に勉強して消防ポンプに帰っても、生活ができない。食べることが人間の一番根源的な問題だから、高校を卒業してすぐに選んで食えないものになれと言うのは無理です。私は体が震えるぐらい怖かった。どうせ食えなくなって死ぬのなら、今死んだ方がましだと思って、激しい鬱病になりました。世間の価値観に負けて、自分の足で歩けなくなった。友だちはみんな立派になっていくのに、それに比べて自分はみじめでした。せめて立派な大きな寺に生まれたかった。それも叶わなかった。けど私はひとつも悪くないと思っていました。悪いのは消防ポンプだし、産んだのは両親だし、周りが悪い。人間は思うようにならないと、最後には周りに叫ぶしかない。けれど周りが悪いといくら叫んでも何も解決しないから、だんだん病気が激しくなっていく。意識があったらしんどいから人の金で酒ばかり飲んで、肝炎になり胃潰瘍、十二指腸潰瘍、膵臓機能障害になって、病院にばっかり通っていました。先にも言ったようにそういう意味では猫の方がエライ。動物病院には神経内科がありません。私は精神病院ばかりに通っていました。

大谷大学には偉い先生がいました。私を育てて下さった先生は学長をされていました。けど今みたいに携帯電話がないから「○月×日午前十時学長室に来られたし　松原祐善」と電報がくるのよ。嫌で嫌で足を引きづるように行くと、「君の問題は世間の学問では解けません。親鸞聖人の教えを勉強しなさい。聖典を開けなさい。」と、十六時ごろまで、昼食も食べずに講義されるのです。大谷大学は親鸞聖人の大学です。その学生が一人死んでいくというのなら、なんとかして助けないと学長の資格がないと思ったのだと思います。

「たのむから生きてくれ。たのむから死なないでくれ。」と、いつも最初と最後には、学生の私に涙を流しながら手を合わせてくれました。私は、もう自分の人生なんか捨ててしまいたいと思っていたのですが、この先生だけは私を捨てないと思えて涙が出ました。講義は何も覚えていませんが、先生の深い優しさだけはこの身に残っています。最後には私が貧しいのを知っていて、いつもビックリするほど多額のお金を下さいました。そのお金はさすがに食費には使えずに、全部本を買いました。七○歳で大学院の特任教授を辞める時、私の研究室の本は一冊残らず学生にあげました。先生に買っていただいたものですから。

もう、本当に死んでいこうと思った時に、やっぱり電報が来ました。その時の先生のお顔は始めから真っ赤で、涙を流して

「延塚さん、頼むから生きてくれ、頼むから死なないでくれ。」と、手を合わされました。

「君は、いい所と悪い所を分けて、まだいいものになりたいのか。勝ったとか負けたとかと、自我の根性で自分を殺す気かね。」「いい所も悪い所もまるごとあんた自身じゃないかね。それを引き受けていけない君自身に、地獄の本がある。」と大きな声で怒鳴りつけられました。

それまでの私は、いつもいい所と悪い所を分けて、いい者になりたかった。「それにつまずいて死ぬ気かね。」と頭から叩き切られて、「困っているのはお前の頭だけじゃ。自我が生まれる前からある、お前の本当のいのちを南無阿弥陀仏というのだ。南無阿弥陀仏のいのちまで殺す気かね。そのいのちは、今までいい所も悪い所も、君を丸ごと支えてきたじゃないか。それが分からんか。」と、涙を流して机をたたかれました。今まで私は外ばかりを見て悪いのは外側だと思っていたのに、その時初めて自分の方に光がさして、はじめからいただいたものを丸ごと引き受けることができなかった。この自我の根性に地獄の本がある。そう思って気が付いたら、部屋の床にひれ伏して「うわー」と泣きわめいていました。その時はじめて人間とは、悲しいものだと思いました。後から生まれた自我の根性で都合が悪くなると自分のいのちまで殺すのかと言われて、なんか訳も分からず、「すいませんでした、申し訳なかった」と思いました。先生は、「南無阿弥陀仏のいのちに頭を下げなさい。いのちのとおりにすべてを引き受けて生きていきなさい。いい所も悪い所も丸ごと自分自身だといえなかったらどうして人を大事にできますか。」と、怒られました。私は私自身になったらいいのだ。いい所も悪い所もまるごと自分だと言える者になったら、どんなところでも生きていける。その時はじめて父親の言っていたことが分かりました。「お前がこれからどんな生き方をするか分からん。しかし、人から褒められるような生き方をしても仏教がなかったら自分の人生にならんのだ、しかし仏教さえ分かれば全部が自分の人生になる。貧しかったら貧しいことに耐えられる。豊かだったら豊かなことを喜べる。まるごと自分自身だと言える人になりなさい。」と言った父親のことが、初めて輝いて見えました。

嫌いだった父親と同じ顔をしている。仏教って不思議でしょ。比べることを超えるということは、自分が自分で良かったということです。そこに自分の人生が完成する。同時にまた人間の関係が回復する。本当の意味で仏さまを中心にする関係に変わっていく。たまたまこの世で父親という姿を取って、私のような馬鹿を仏さまの世界に導いてくれていました。「ただ念仏して、弥陀にたすけられまいらすべし」と教えていたのです。はじめて父親が輝いて見えました。それまでは喧嘩ばかりしていましたが、それからは父親に一度も逆らったことがありません。南無阿弥陀仏は本当のいのちの名だと先生から教えられました。自我をも超えた無量寿、それがみなさんひとり一人の中に流れている。有限な人間が有限な人間を救うことはできない。けれ

ども有限な人間の中に無限のいのちが流れている。それを教えられてはじめて救われていく、自分以外のもので救われたら救われたものに囚われる。麻原彰晃に救われたら、麻原彰晃の言うことを聞かなければならない。仏教はそうではありません。お釈迦様は、わたしのところへ来いとは言っていない。「彼の国に生まれよ」これが真宗の教相です。みなさんひとり一人の中に流れている法に目覚めよ、ひとり一人独立者として生きていけ。それがお釈迦様の教えですから素晴らしいとは思いませんか。

私ははじめて仏教を勉強しようと思いました。今まで世間で立派だと言われるものになりたかった。けどそんなものは一切いらない、この先生のようになりたいと思いました。いつも自分らしく、絶対に威張らなかった。けれど私たちのような学生にも、延塚さんとさん付けで呼んでくださった。この先生だけは私を捨てないのだと思えて涙が出ました。南無阿弥陀仏のいのちは何も文句をいっていない。お前を今日まで生かしてきたそのいのちに頭を下げなさい。仏教が本当に分かるということは、ごめんなさいという懺悔と自我を超えた大きな世界に生かされている讃嘆。懺悔と讃嘆、それが本当に仏教を身でいただいた時の感動だと思います。

最初に申しましたように、本願の教えが親鸞聖人の身に突き刺さって、この身全体を救った感動を、「帰命無量寿如来」と叫ばれた。分別を越えた量ることができない仏さまのいのちに帰命しますと頭を下げた。そしてそれは、人間の分別を越えたさとりの世界から教えて下さる教えだから。そのことばがわたしたちに届けば光という意味を持つ。「帰命無量寿如来　南無不可思議光」これが親鸞聖人の「正信偈」の最初のことばです。お釈迦さまもさとりを悟った時に「不死のいのちを得た」と叫ばれた。それを親鸞聖人は本願の教えによって自我をも超えた大きな仏さまの無量のいのちにわたしのいのちを帰します。ここに有限な命を超えた、無限の喜びがあります。

「生きることも死ぬことも、仏さまにいただいたものであります」、これが私をお育て下さった先生の最後のことばでした。八十四歳の時に癌で亡くなりました。まだ手術すれば治るので、手術してくださいと何度もお願いしましたが、「いやこれで結構です。私は親鸞聖人の教えによって、まるごと自分のいのちをいただいたのだから、これで人生は完成しました。生きることも死ぬことも、仏さまにいただいたいのちです。癌もこの痛さもいただいたものです。」と、最後まで痛み止めも打ちませんでした。いい所も悪い所もまるごと引き受けていのちを終えられました。「正信偈」は、自我のいのちを超えた仏さまのいのちに目覚めた方の偈なのです。「恩徳讃」をいつも斉唱しますが、「身を粉にしても奉ずべし、骨を砕きても謝すべし」、普通の常識ではできません。それはこの世のいのちは、いつでも仏道に捧げる。生きることも死ぬことも、南無阿弥陀仏の中にあるのです。そういう大きないのちに目覚めた方の偈だと思います。ありがとうございました。

〈おみがき〉

五月十四日午前十時頃より仏具のおみがきを行います。ご門徒のみなさんと一緒に仏具を磨いてキレイな荘厳で永代経法要をお勤めできればと思います。みなさんのご参加をお待ちしております。

〈茨木別院門徒会総会〉

永代経法要にあわせて令和六年度茨木別院門徒会総会を開催します。今年の年間行事や収支報告を行い、茨木別院の今年度の運営計画をご門徒のみなさんと考えていかせていただければと思います。是非ともご参加ください。

〈須弥壇納骨のご案内〉

本堂須弥壇（ご本尊）の下に納骨壇を設けております、たくさんの方にご利用いただけるようご案内いたします。

・冥加金（茨木別院門徒・ご崇敬内門徒）

一体　七万円

・その他

一体　十万円

真宗大谷派に所属する寺院・僧侶・門徒に限らせていただきます。

敬弔

ご生前のご遺徳を偲び、謹んで哀悼の意を表します。（敬称略）

――記――

●法名　浄信院釋大願
俗名　米谷 元男　八十六歳

●法名　満徳院釋尼法喜
俗名　古川 牧子　九〇歳

●法名　釋幸芳
俗名　小寺 幸生　九十三歳

●法名　普光院釋尼喜香
俗名　國枝 喜久枝　九十四歳

●法名　釋大慶
俗名　松元 慶三　八十五歳

●法名　超日院釋尼光照
俗名　奥村 テル子　九十一歳

●法名　釋尼慶俊
俗名　泉 俊子　八十七歳

編集後記

最近の茨木別院では、春秋の彼岸、夏の盂蘭盆に比べて五月の永代経法要では少しお堂が寂しい参詣者の人数になっています。ちょうど彼岸とお盆の間の季節のお勤めということもあり、足が遠のいているのかもしません。永代経法要というのは、亡くなられた方を縁として、そのいただいた仏さまとの縁を永代にわたってつないでいくという大切なお勤めでもあります。

お墓参りもお盆、彼岸のタイミングだけでなくこの機会にもお参りいただき、永代経法要にもひとりでも多くご参詣いただければと思います。

竹内 明人

―生花・供花・けいこ花―
株式会社 花廣
茨木市大手町一二-八
☎（〇七二）六二二一-二四〇二